

定例研究会要旨

日時：平成 24（2012）年 12 月 5 日 17:40～19:40

会場：東京外国語大学 語学研究所

題目：「ヴォイスとその周辺 ―ドイツ語からの問題提起―」

発表者：成田 節（東京外国語大学大学院総合国際学研究院教授/ドイツ語学）

この報告では、受動態を中心にドイツ語のヴォイスの要点を紹介し、それと関連して他の言語についていくつか問題提起をした。

ドイツ語では、ヴォイス (Genus verbi または Diathese) という用語で通常は能動態 (Aktiv) と受動態 (Passiv) を指す。言語学事典などはギリシャ語やサンスクリット語の中動態 (Medium) も言及しているが、使役 (lassen 「～させる」 + 不定詞) がヴォイスとの関連で記述されることは少ない。

問題提起 1：他の言語の文法記述では「ヴォイス」に通常どのような言語現象が含まれるか？

werden-受動文を代表として対応する能動文と比べると、ドイツ語受動態の特徴は、形態・統語的には (a) 述語の形態の変更 (本動詞の過去分詞と助動詞 werden の組み合わせ)、(b) 項の実現形態の変更 (動作主項＝主格主語の非主語化、動作対象項＝対格目的語の主語化；対格目的語を持たない能動文には無主語の受動文が対応する) の 2 点に、文意味的には上記の形態・統語的変更に対応して、(c) 動作主の背景化、(d) 動作対象の前景化、および (e) 無主語受動文の場合は動作・行為の前景化という 3 点にまとめられる。これら文意味的特徴は、(a) については「前後の文脈から動作主が明らかで、明示する必要がない場合」あるいは「不特定多数の動作主による行為を表す場合」などで受動態が好んで用いられることにも見て取れ、(d) については「動作対象を主語かつテーマとして表示し、談話の流れをスムーズにする」あるいは逆「動作対象を主語とするが、新情報として提示する場合」という、談話構造に関して二方向の働きがあることを述べた。そして、ドイツ語の受動態の意味 (働き) を「動作主の背景化と被動作者の前景化という視点 (注視点) の変更」と捉え、日本語では [ラレル] 形述語を持つ文のうち「(有情の) 主語者が感じる被影響感」としての〈被影響〉を表す文を受身文するという捉え方 (川村 2012: 110) とは大きく異なることを指摘した。

問題提起 2：どの言語で態の選択を視点 (注視点) の変更としてとらえられるか？あるいは〈被影響〉のような特徴によって規定されるか？

「動作主の背景化 + 被動作者の前景化」という文意味的な変更は、ドイツ語では werden

を助動詞とする受動態だけでなく、sein, bekommen, gehören と過去分詞の組合せで作られる（広義の）受動態，あるいは再帰代名詞を用いた表現，sein と zu 不定詞の組合せからなる表現なども上述のような「動作主の背景化＋被動作者の前景化」に関わる。

問題提起3：ドイツ語にはこのように「動作主の背景化＋被動作者の前景化」の働きという点で共通するパターンが多くみられる。他の言語では，どのような文意味的変更のパターンに表現の広がりが多く見られるか？

最後に，sein＋過去分詞の多義性（その内の一つが，惹き起された変化の結果状態を表す「状態受動」）と，それに対して werden＋過去分詞の一義性（ほぼすべてが受動態）についても触れた。

文献：川村大 2012 『ラル形述語文の研究』くろしお出版